

平成28年度
入学試験問題

国語

2月1日 第1限

仁愛女子高等学校

一 次の文章は、又吉直樹『火花』の一節である。若手芸人の「僕」は、熱海の花火大会での仕事の後、常識破りで癖のある先輩芸人

「神谷」と師弟関係を結ぶ。僕も神谷も芸人としてなかなか芽が出ない中、二人は仲を深めていく。これを読んで、あとの問いに答えよ。
(設問の都合上、文章には改変した箇所がある。)

神谷さんの淀みなく流れるような喋りを聞いてみると、自分が早く話せないことに苛立つ時があった。頭の中には膨大なイメージが渦巻いているのに、それを取り出そうとすると言葉は液体のように崩れ落ちて捉まえることが出来ない。複数人での会話になると更に症状は顕著だった。人の数が増えると言葉の数も増える。一つ言葉が耳に入ると、そこから派生した別個の流れが生まれ、頭の中でいくつものイメージが交錯して、どこから手をつければいいのかわからなくなるのだ。神谷さんは、そんな僕を面白がってくれた。

「早いテンポで話した方が情報を沢山伝えることが出来んねん。多く打席に立てた方がいいに決まってるやん。だから、ゼツタイに早く話した方がいいのは確かやねん。でも、お前はそれが出来へんねやろ？ そんなお前やからこそ、人と違う表現が出来るんやんけ。ええな。俺の実家な全然貧乏じゃなかったん。子どもの頃な、ゲームとか玩具とか普通にあったからな、それで遊んでんけど、よく中年が、俺等の頃は遊び道具なんてなかった、とか言うやん。あれ聞くとびにな、俺、わくわくすんねん。こんなん言うたらあかんねやろうけど、ほんまに羨ましいねん。だって、ないなら自分で作ったり、考えたり出来るやん。そんなん、めっちゃ楽しいやん。作らなあかん状況が強制的にあんねんで。お前やったらわかるやろ？ お前の家、めっちゃ貧乏そうやな」と神谷さんは淡々と失礼な発言をするが、そこに悪意は感じられなかった。

………【第一段落】
実際に僕の家は裕福ではなかった。玩具の類は一切なかった。一日中、紙に絵を描いて過ごす日もあった。父親の将棋盤を拵げ、独自の駒の動かし方を考案して全ての駒を使い、誰に攻め込まれても崩れない布陣で王将を守り、誰も攻めてこないことに気づくまで待ち続けたこともあった。神谷さんは僕がそういう話をすると酷く羨ましがった。姉が紙のピアノで「ねこふんじやった」の練習をしていた話を何度も繰り返し僕に話させた。

………【第一段落】
姉は、家にピアノやエレクトーンがある友達に遅れを取らないように必死だった。しかし、ある日、「頑張ってるお姉ちゃん、見に行こう」と、僕を保育所までムカえにきた母に連れられ、姉の通うヤマハの教室を覗きに行くと、他の生徒達は演奏しているのに、

姉だけエレクトーンの前の椅子に座った状態で、落ち着きなく周りをうかがい、エレクトーンの裏を手で触ったりしていた。^④なぜ弾かないのだろうか？母も不安そうに姉を見ていた。ようやく異変に気づいた先生が姉の側に寄って行くと、姉は「音が出ない」と言った。すると先生が当たり前のように、エレクトーンの電源を入れて、姉も途中から演奏に加わった。姉は緊張で身体が強張り、異常に両肩が上がっていて無様だった。いつもは優しくて頼りがいのある姉のこんな姿を見ると、なぜか僕は胸が苦しくなり、眼から涙が溢れた。「なんで、あんたが泣いてるの？お姉ちゃん頑張ってるで」と言った母の眼も赤かった。その夜、家に帰ってからも姉は無言で紙のピアノを懸命に弾き続けていた。^⑤僕は姉の隣に座り、全力で姉が演奏する曲を唄った。酒にヨった父が「やかましいんじゃ」と怒声を上げて僕達はやめなかった。数日後、狭い文化住宅に小さいけれど立派なピアノが届いた。父は母を激しく罵った。母が姉のために独断で買ったのだ。この話をすると、神谷さんは鼻を嚙りながら、「ええな。そんなお前にしか作られへん笑いがゼツタイあるんやで」と優しい声で言うのだった。

……【第三段落】

問一 二重傍線の部分ア～オの漢字は読みをひらがなで書き、カタカナは漢字で書け。

問二 傍線の部分①「液体のように」の表現技法として適当なものの記号を書け。

ア 直喩 イ 隠喩 ウ 倒置 エ 擬人法 オ 体言止め

問三 傍線の部分②「わくわくすんねん」とは「わくわくする」ということだが、その理由として最も適当な部分を【第一段落】の中から二十字以内で抜き出し、そのまま書け。

問四 傍線の部分③「そこに悪意は感じられなかった」とあるが、「僕」がそのように思った理由として最も適当なものの記号を書け。

ア 神谷の発言は失礼だが、家が貧しいことは事実であるから。

イ 神谷の発言は失礼だが、彼自身にその自覚が全くなかったから。

ウ 神谷の発言は失礼だが、それは僕に対する評価をごまかす照れ隠しだとわかったから。

エ 神谷の発言は失礼だが、本当に僕のことを羨ましいと思っていることが伝わってきたから。

問五 傍線の部分④「なぜ弾かないのだろうか？」とあるが、姉が弾かなかった理由として最も適当なものの記号を書け。

ア 母親と弟が見に来ていて緊張し、固くなっていたから。

イ 本物のエレクトーンを弾いたことがなく、電源の入れ方がわからなかったから。

ウ 課題曲の練習をしていなかったということを気付かれてしまうのが怖かったから。

エ 姉が練習していたのはピアノであり、エレクトーンの練習はしたことがなかったから。

問六 傍線の部分⑤「懸命」の類義語として最も適当な言葉を【第三段落】の中から漢字二字で抜き出して書け。

問七 傍線の部分⑥「僕は姉の隣に座り、全力で姉が演奏する曲を唄った」とあるが、その理由として最も適当なものの記号を書け。

ア 姉を馬鹿にした人たちを、姉と一緒に見返してやろうと思ったから。

イ 一生懸命練習する姉を、何か自分に出来ることで応援しようと思ったから。

ウ 無様な姉のようにならないために、自分は今のうちから練習しようと思ったから。

エ 極度の緊張のため何もできなかった姉に対して、怒りをぶつけようと思ったから。

問八 傍線の部分⑦「鼻を咬りながら」とあるが、ここに表れている「神谷」の心情として適当なものを二つ選び、その記号を書け。

ア 貧乏を言い訳にせず、その中で努力し続ける姉への賞讃。

イ 子どもたちに玩具を買い与えず、当り散らすような父親を持つ僕への同情。

ウ 家族全員がその時々自分にできることを探し、行動するたくましさへの羨望。

エ 貧乏ゆえに苦勞しているが、その中でも楽しさを見つけ出そうとする姉への共感。

オ 母や僕の、言葉には出さなくても、その行動によって協力し合い、支え合う家族愛への感動。

問九 右の小説『火花』は二〇一五年七月にある文学賞を受賞した。その賞に名を冠する作家として適当なものの記号を書け。

なお、その作家の作品には、「蜘蛛の糸」「杜子春」「羅生門」「鼻」などがある。

ア 森鷗外 イ 太宰治 ウ 夏目漱石 エ 芥川龍之介

二 次の二つの文章【I】・【II】を読んで、あとの問いに答えよ。(設問の都合上、文章には省略・改変した箇所がある。)

【I】

二、三日前、美濃中津川のすやという菓子屋の栗きんとんを送ってくれた人があった。礼状に私は腰折を一首、ひねり出して書き送った。**A**ふみわけて落栗ひろふ山里はあはれもふかく鹿のなくらん。眠れぬままに、この一首を作り変えようとして天井を見上げていると、菓子屋の名を物名として織りこんで腰折をもう一首作れぬものかという思案に、いつしか耽っていた。**①**『徒然草』第四十段に、

因幡国に、何の入道とかやいふ者の娘、かたちよしと聞きて、人あまたいひわたりけれども、この娘、ただ栗をのみ食ひて、更に米

のたぐひを食はざりければ、かかる異様のもの、人に見ゆべきにあらずとて、親、ゆるさざりけり。

食べなかつたので

人と結婚するべきではない

結婚を許さなかつた

多くの人が求婚し続けたけれども

全く

栗しか食べないこの美しい娘に言い寄る男のうちに、とりわけ深く恋着している男があったとして、その男の身になって一首を作れぬものか。鳴(泣)く鹿の目になみだの露の乾く間もない山里。露の宿。落栗拾う女。すやという物名をひそませるだけの工夫に、**③**冬の朝が白んでいた。『古今集』をまねて仮名文字をつらね、濁点をつけずに、

B なくしかのつゆひすやとるやまさとおちくりひろふそてのおもかけ

(杉本秀太郎「落栗」による)

注1 腰折——へたな歌。

注2 和歌Aの歌意——草木や落ち葉を踏んで分け入り、地面に落ちた栗の実を拾う山里では、たいそう切なく雄鹿が(雌鹿に求愛して)鳴いているだろう。

注3 物名——歌の中に、歌意とは関係なしにある言葉や隠しておく技巧。とくに、文字を連続して隠すものをいい、音の清濁は問わない。

例 あしひきの山たちはなれゆく雲の宿りさだめぬ世にこそ有りけれ(古今集・四三〇)
歌意 山を離れてただよってゆく雲のように、今夜の宿りさえ定まらない人の運命であるよ。
物名として「たちばな(橘)」が隠されている。

④『徒然草』は古い書物なのによく読まれていと言ったのでは、いささか正確を欠くと思われる。『徒然草』の学習参考書には多大の需要があると言いつ改めたほうが実情に近いと思われる。私は時折りピアノ・リサイタルを聴きに出かける。聴衆のうちから二十歳前後の若い女性、数においてそれよりも劣勢の若い男性、この二種族を除いたなら、残りの大部分は学校あるいは自宅でお弟子をとっているピアノの先生という種族であり、そういう人たちをさらに除いたあとには、中年、老年の音楽好きという種族が残るが、その数は渺たるものである。ピアノ・リサイタルの聴衆に見られるこの種族混合率に変わりがない限り、我国の音楽事情に先あかるい見通しは到底立たないように私には思われる。⑤年齢、身分、職種、いずれにおいても多様かつ重層的な、見通しにくい厚みをそなえた聴衆が形成されたとき、音楽事情の見通しは、逆にあかるくなるだろうからである。同様に、喩えるなら『徒然草』演奏会場には、学習中の高校生と国語の先生が大挙して押しかける。四十歳、五十歳、六十歳になっても、この会場に自発的に足を運ぶ人の数は、ピアノ・リサイタルにおけるときほど異なるはずはない。演奏会の主催者ではなく、ひとりの聴き手としてこれを省みれば、盛況をよるこぶ気にはなれない。加えて、『徒然草』演奏会には、噴飯の至り^⑧とでも言うしかないようなま^⑨演奏が多すぎる。序段の「あやしうこそものぐるほしけれ」を口語に移して「変に気持ちが染みていることだ」などと訳してあるのが学習参考書の通例なのだから。恐れ入っているうちに腹が立ち、やがて情けなくなる。

小林秀雄の『無常といふ事』は、創元社から昭和二十四年一月に改装初版の出た直後に買い求めて以来、忘れ得ない書物となった。私は十八歳になったばかりだった。同書にオサ^⑩めてある『徒然草』を論じた五頁にも満たない短文は、長いあいだ私を眩惑^⑪しつづけた。「つれづれなるままに」という語の解釈にあたって、私にはあの短文に最も多くを負うたという自覚がある。けれども、小林秀雄の素描した兼好の肖像は悲愴味^⑫が濃すぎると、今では思うようになった。モーツァルトにも、ゴッホ、セザンヌにも、西行、実朝^⑬にも、ドストエフスキーにも、あの人は同じ悲愴なタッチと色調をあたえる。笑いは消されてしまう。兼好の頬に、笑えば深ぶかと泛^⑭ぶ条目を取り返して、なぜ悪かろう。『徒然草』第四十段を引用し、これに付け加えられた一行の短評に、私は肯定をためらう。あの一行は目つぶしの泥である。

鈍刀を使つて彫られた名作のほんの一例を引いて書かう。これは全文である。

「因幡国に、何の入道とかやいふ者の娘、かたちよしと聞きて、人あまたいひわたりけれども、この娘、ただ粟をのみ食ひて、更に米のたぐひを食はざりければ、かかる異様のもの、人に見ゆべきにあらずとて、親、ゆるさざりけり」(第四十段)
これは珍談ではない。徒然なる心がどんなに沢山な事を感じ、どんなに沢山な事を言はずに我慢したか。

むつかしい顔ではなくて、相好を崩している兼好が、私には想像できる。鹿の生まれ変りとおぼしい美しい女に動かされる色好み的心を小林秀雄はよく承知していたはずなのに、それを「X」のは、精神の劇を追い詰めるという批評の構えを崩したくなかつたのだろう。栗しか食わぬ「異様の者」の多情をおそれた親の心配も、小林は「X」のか。だが、何でも言える文体のお手本なら、ほかならぬ『徒然草』に見当たるではないか。

第百八十九段に兼好はしるしている――

今日はその事をなさんと思へど、あらぬ急ぎ先出で来てまざれ暮らし、待つ人はさはりありて、頼めぬ人は来り、頼みたる方の事は違ひて、思ひよらぬ道ばかりはかなひぬ。わづらはしかりつる事はことなくて、やすかるべき事はいと心ぐるし。日々に過ぎ行くさま、兼ねて思ひつるには似ず。一年の中もかくの如し。一生の間もまたしかなり。
前もつて予期していたのとは違つて、
前もつて予期していたこと
うまくゆかないか
うまくいつてしまふ
ひととせ
うら
無事はかどり
たやすいはずの
進まず苦心する
毎日が
そのとおりである
たまたま思うとおりになることもあるので
ますます物事は予想することが難しい。実感がたく不確かであると承知してしまうことだけが真実であつて
思いがけない急用
それまきれて一日過してしまひ
さしざわりがあつて来ず期待していない
期待していた方面
13

違はず。
間違いないのだ

⑭ 全くその通りの事情から大いに手間取り、担当編集者を困らせること一通りではなかつた。

(杉本秀太郎『古典を読む 徒然草』「あとがき」による)

注1 渺たる――きわめて少ない。

注2 小林秀雄――東京生まれ。文芸評論家(一九〇二―一九八三)。

注3 眩惑――目をくらませてまどわすこと。

問一 和歌[A・B]に共通して詠み込まれている季節として適当なものの記号を書け。

ア 春 イ 夏 ウ 秋 エ 冬

問二 空欄

X

 に入る言葉を小林秀雄の一行の短評「これは珍談ではない。徒然なる心がどんなに沢山な事を感じ、どんなに沢山な事を言はずに我慢したか」という文章から十字以内で抜き出し、そのまま書け。

問三 傍線の部分①「『徒然草』第四十段」において、親の発言（気持ち）が記されている箇所を抜き出し、初めと終わりの三字をそれぞれ書け。

問四 傍線の部分②「その男」を筆者は和歌[B]の中で何と詠んでいるか。二つの単語から成る言葉を抜き出し、そのまま書け。

問五 傍線の部分②「その男」を筆者は文章【Ⅱ】の中で何と記しているか。24行目から27行目までの中から、三字で抜き出して書け。

問六 傍線の部分③「冬の朝が白んでいた」とは「冬の夜が明けて、明るくなった」ということだが、この表現によって筆者はどのようなことを言い表そうとしたのか。五十字以上、六十文字以内で書け。（句読点は字数に含む。）

問七 傍線の部分④「『徒然草』は古い書物なのによく読まれていると言ったのでは、いささか正確を欠くと思われる」とあるが、その理由を、傍線の部分⑦「聴衆」を含む一文の中の言葉を用いて五十字以上、五十五字以内で説明せよ。

ただし、「聴衆」が何のたとえであるか明らかにすること。（句読点は字数に含む。）

問八 傍線の部分⑤「需要」の対義語を漢字二字で書け。

問九 傍線の部分⑥「れる」について、

I これと同じ意味・用法の「れる」を含む文として適当なものの記号を書け。

ア 虎に襲われる。

イ 先生が話される。

ウ わたしは速く走れる。

エ 彼女のことを思い出される。

II この文法的意味（たとえば、「推定」「断定」など）を表す言葉を文章【II】の1行目から12行目までの中から漢字二字で抜き出して書け。

問十 傍線の部分⑧「噴飯の至り」と⑩「相好を崩している」とに共通する表情（しくま仕草・行為）を表す文字を文章【II】の13行目から19行目までの中から漢字一字で抜き出して書け。

問十一 傍線の部分⑨「演奏」とは何のたとえか。文章【II】の1行目から12行目までの中から五字で抜き出して書け。

問十二 傍線の部分⑩「オサ」と同じ漢字を含む文として適当なものの記号を書け。

ア 国家をトウチする。

イ 税金をノウニユウする。

ウ 野菜をシユウカクする。

エ 学問をシユウトクする。

問十三 傍線の部分⑫「何でも言える文体のお手本」とあるが、『古典を読む 徒然草』を本として出版するのに手間取り、ほぼ四年の

長い歳月を要した筆者が、『徒然草』「第百八十九段」を引用することによって、何をしようとしているのか。
解答欄に合う言葉を次の語群から選び、漢字二字の熟語を完成させて書け。

語群 配リヨ 悲タン ファン慨 ベン解

問十四 傍線の部分⑬「わづらはしかりつる事は」を現代仮名遣いに直し、すべてひらがなで書け。

問十五 傍線の部分⑭「全くその通りの事情から大いに手間取り」とあるが、本を出版するのに筆者を大いに手間取らせた「事情」として最も適当な箇所を『徒然草』「百八十九段」から三十五字以内で抜き出し、初めと終わりの三字をそれぞれ書け。

(句読点を含まない。)

問十六 次の作品は成立順に古いものから並んでいるが、『徒然草』はどこに入るか。適当なものの番号を書け。

(1) ↓万葉集 ↓ (2) ↓竹取物語 ↓ (3) ↓枕草子 ↓ (4) ↓平家物語 ↓ (5)

